

梶井基次郎作品の受容について

『檸檬』の刊行形態と評価の変遷

西尾 泰貴

はじめに

二〇一五年八月二日に丸善がグラントオーブンするといふニュースが流れた。丸善は一八七二年に二条通柳馬場東に京都支店を開設して以降、閉店、移転を繰り返して、二〇〇五年に京都河原町店の閉店以来一〇年ぶりのリニユーアルオーブンであった。梶井基次郎の「檸檬」の舞台となったのは一九〇七年から一九四〇年まで三条通麩屋町にあった丸善だったのだが、河原町店の閉店の際にも多くの来店客が本の上にレモンを置く様子が話題となっていた。¹⁾

「丸善」といえば「檸檬」が出てくるように、「梶井基次郎」といえば「檸檬」が出てくる。確かに現在書店にある梶井刊行物のほとんどは「檸檬」というタイトルを冠している。刊行物のカバーにもレモンは描かれることが多く、代表作として見なされることが多い。

しかし、梶井基次郎はいくつかの短編のみを残して没したため、今日「檸檬」というタイトルが冠せられている梶井刊行物は、「作品集」という形で受容されている。その作品

集の中でも「檸檬」は巻頭に置かれることが多いが、「作品集」として受容されているにも関わらず、「檸檬」と他作品の受容の差はかなり大きいように思える。

本論の目的は梶井基次郎の「檸檬」が、これまで指摘されているように、梶井の作品群の中でも評価され、代表作として見なされてきた理由を明らかにし、「檸檬」が代表作である原因を梶井の「資質」に還元してしまうこれまでの研究傾向を批判的に捉え、検証していくことである。

梶井は、「作品群」全体を評価している論もある一方で、多くの研究は「檸檬」に集中している作家である。しかし、先行研究によれば「檸檬」は当初あまり注目されていないかっただよう。それにも関わらず、今日刊行されている「梶井基次郎作品集」の多くは「檸檬」を冠したタイトルとなっている。それはなぜなのだろうか。

梶井の評価の高まりに関して、先行研究では後述するように「全集」の刊行によってのみ説明されており、「檸檬」の評価の高まりに関しては作品内容によってのみ説明されることが多いが、本稿では「全集」以外の梶井の刊行物や

先行研究の変遷、さらには国語教科書採択の事例も視野に入れ、「檸檬」というタイトルが梶井の刊行物において通例化し、梶井の代表作として見なされるようになっていったプロセスを明らかにしたい。

本稿は「梶井基次郎」作品の受容に関する研究の一環であり、今回は全集以外の刊行物と研究の変遷にのみ着目したが、今後は国語教科書採択との関わりをも追求することを視野に入れていく。

本論の構成は「一 作品の評価と「檸檬」の評価」、「二 当時の文学状況と同時代評」、「三 「檸檬」刊行形態の変化」、「四 「檸檬」研究状況の変化」である。

一、他作品の評価と「檸檬」の評価

梶井作品の評価に関して福永武彦は「梶井基次郎は大正末期から昭和初期にかけて、珠玉のような名作を幾つか書き残した作家」であり、「死後に於て、梶井の文学は最も多幸な運命を持った。昭和九年に早くも二冊本の六峰書房版の全集が出ているし、作品社版、高桐書院版などの全集を経て、今年昭和三四年には三冊全集本が、決定版として筑摩書房から出版され」、「梶井の文学の持つこの人気は、生前の梶井の持つ人柄のせいなどに帰すべきものではない。梶井の文学そのものに、人を惹きつけてやまない魅力が蔵されているのだし、それは今日に於てますますその新鮮さを際立たせている」と

述べている。

また、須藤松雄は「昭和七年、三十二歳で病死したこの作家の多からざる作品は、厳しい必然性において自然を取り上げ、高い密度で表現した。まぎれもなく、日本の自然文学の珠玉である」と述べている。

このような神聖視を加速させるような評はまさに梶井の評価軸となっており、福永と須藤が述べるような、珠玉の作品を残した後、若くしてこの世を去った、という作家性も梶井に対する一種の神聖視を加速させているのだろう。

そのような評の中で、「檸檬」は三好行雄が「発表当時はほとんど無視されていたが、いまや梶井基次郎の代表作としてこれほど安定した評価を得ている作品も珍しい」と述べ、黒井千次も「梶井」というと「檸檬」ばかり出てくるでしょう。文庫本を見たって、みんな「檸檬」が入っていて、表紙のカバーもそのイメージでしょう」「代表作ということにはなるかもしれない」と述べているように「梶井基次郎の代表作」として評されている。

三好や黒井が述べたような「檸檬」は梶井基次郎の代表作であるという評は、決して印象批評に留まるものではない。次の表は国文学論文目録データベースにおいて「梶井基次郎」という作家名と梶井の作品名を個別に検索し、ヒットした件数を示した表である。

国文学論文目録データベースは全ての梶井研究を網羅して

作品名	件数
檸檬	156
城のある町にて	33
泥濘	19
路上	14
橡の鼻	7
過古	7
雪後	5
ある心の風景	14
Kの昇天	18
冬の日	28
桜の樹の下には	22
器楽的幻覚	9
蒼穹	17
寛の話	7
冬の蠅	29
ある崖上の感情	10
愛撫	5
闇の絵巻	15
交尾	11
のんきな患者	23

いるものではないが、それでも「檸檬」と他の作品にはかなりの隔たりがあることが分かるだろう。「檸檬」の一五六件という数は二番目に多い「城のある町にて」と比較しても、一二〇件以上の差がある。

「檸檬」は梶井基次郎の代表作」という見方は、先行研究においては「檸檬」の刊行状況や変遷を見ずに、作品の読解のみで説明されたものが多い。しかし、データベースの数値によってもはつきりと分かるような「檸檬」は梶井基次郎の代表作」という見方は、前述した先行研究でも指摘されているように、梶井の生前から出来上がっていたものではなかった。つまり、この見方は作家の資質や作品の内容だけでは説明することが出来ないのである。「檸檬」受容の変化をとらえるために、まずは同時代評から梶井の「檸檬」に対する評価を見ていこう。

二、当時の文学状況と同時代評

梶井基次郎が作家活動を行っていた時代は、新感覚派が流行・衰退をし、大衆文学が流行、プロレタリア文学運動が展開、芸術派が登場、という文学状況であった。そのような文学状況の中、梶井の同時代評にはどのようなものがあったのだろうか。

梶井の同時代評は、全体として肯定的な評価が多く、作品を批判した評は少ない。外村繁の「梶井の「過古」について」では「梶井の一月号の「過古」を読みながら、私は不図懐かしい匂ひを嗅いだ。それは此の少年時代の香はしい枯れ草の匂ひだつた。私は読み終わつて、実にいゝ作だと思つた。青空もこない、ものを載せるようになったかと思ひ、一寸私は得意だつた」と述べられている。

また井伏鱒二は「或ひは失言？」において「文藝都市七月号で「ある崖上の感情」を読み、それから「梶井基次郎君の印象」「筆者注・浅見淵が『文藝都市』昭和三年七月号に掲載した評」を読んでみて、私は梶井君の浄心を尊しとし、また浅見君の芸術に対する態度を尊しとした。これはよき傾向である」と述べており、川端康成は「梶井基次郎氏の「愛撫」で「しかし、久しぶりに彼の作品「愛撫」(詩・現実、第一号所載)を読んで、私の意見は顔を赤らめた。この傑れた、短い散文詩風の作品は、説明すべき種類のものではない

けれども、とにかくこれは、少なく書く人が書ける作品である。多く書く人の書けない作品である。このやうな気品は、書かないでゐることからしか生れないのではないかと思ふ¹⁰⁾と述べているように『青空』同人以外からも一定の評価を受けていたことが分かる。

批判的な評として挙げられるものは匿名の「同人雑誌短評 其の一」という評における梶井の「或る崖上の感情」に対する「変な安っぽい無常主義しか響いては来ない。吾々はさうした無常感に安住してゐる梶井氏の境地を嘔うと共に、積極的に生きることを切に希望する¹¹⁾」や正宗白鳥の「文藝時評(一)」における「のんきな患者」に対する「はじめて名を聞く作者であるがそのためか懸賞小説の応募原稿を読むやうな気がした。しかし読んでゐるうちに、私にも親しみが起つた¹²⁾」くらいである。

これら作品の評価においては、先行研究でも指摘されているように、「檸檬」は当初から注目されていた作品ではなかった。「檸檬」に触れていた同時代評は少なく、主なものとして「青空合評會第一回」で行われた「檸檬」と「冬の日」の比較批評における丸山薫の「檸檬」の方がよい。梶井は小さなファンタジーを沢山持つてゐて、書く時に一つに纏めて個々のものを一つにつないだと思はれる。梶井のこれを知らぬ人は気が付かぬかも知れぬが！という発言や淀野隆三による「檸檬」と「冬の日」は濃度が違ふ。「冬の日」の方

が濃度が濃いと思ふ¹³⁾という発言、伊藤整による「檸檬」での「小説としての構成、配列は下手だ。否むしろテエマやプロットを生かすために、自分の中に醗酵させた精神の純度を犠牲にすることは氏は極端に避けたものらしい。だから氏の作品を読むと、全体にはわざわざ打壊したやうな拙さがあつて、それがあつたためにかへつて局部的な魅力がよく生きてゐる。それがことに長い作品に多く、短い諸作品は局部だけの魅力であるがために、ほとんど皆成功してゐる¹⁴⁾」というものが挙げられる。

しかし、いずれにしても「檸檬」の評価は高いとは言えず、しかも印象批評の域を出ないものであつた。では一体「檸檬」の評価の高まりはいつから、どのような理由によつて起こつたのだろうか。

三、『檸檬』刊行形態の変化

前節でも述べた通り、「檸檬」は発表当初から注目を浴び、高い評価を受けていた作品ではない。しかし、先の黒井が言



うように現在書店に並ぶような梶井の刊行物は「みんな「檸檬」が入っており、表紙のカバーもそのイメージ」となっている。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

このように大きく刊行形態を変化させた「檸檬」だが、先行研究において刊行形態の変化について述べているものは非常に少ない。しかし、先に述べた福永の論に「死後に於て、梶井の文学は最も多幸な運命を持った。昭和九年に早くも二冊本の六峰書房版の全集が出ているし、作品社版、高桐書院版などの全集を経て、今年昭和三十四年には三冊全集本が、決定版として筑摩書房から出版されている」とあるように、全集の刊行に關しての指摘は幾つかの論において見受けられる。

鷺只雄は、全集の中でも筑摩書房版による梶井受容の拡大、増加に触れている。鈴木貞美は「梶井基次郎の評価は、作家歿後、最初の六峰書房版個人全集（一九三四）の刊行時を前後にして「わかに高ま」ったとし、評価の傾向を「①西欧近現代文芸の本質を実現した「詩」に近いものという評価の流れがあり、②そこから想像力による散文の構築物という面を強調するものが分岐する。それらに対して、③東洋的な美学を体現するものとして、肯定する立場と、否定する立場に分かれる」としている。⁽¹⁷⁾

鷺は一般読者の受容を、鈴木は主に作家の受容を述べているのだが、「全集」の刊行のみに着眼点を置いたこのような

指摘では「檸檬」単体が他作品と比べて多くの評価を得ている説明がつかない。果たして全集だけで説明できるのだろうか。

そこで考えなければならぬ点は、全集以外の刊行物の変遷である。梶井の受容は全集のみによって行われていたわけではない。川村二郎は「討議Ⅱ 梶井基次郎 書くこと見つめること」の中で次のように述べている。

ぼくが梶井を最初に読んだのは昭和十九年か二十年なんです。本の一番少ない時ですね。ぼくは十九年に高校に入ったんだけど、本を読みたくてもないから、本が宝物みたいな感じになってくる。その頃高校生にとつて、岩波文庫なんてのは貴重品扱いの感じがあつて、そのほかに、これは必ずしもみんながそうだったかどうか知らないけど、創元選書つてやつが、まあ教養の上で權威ありげに見えていたんだな。この選書には小説はあんまりはいつていないんだけど、どういうわけだか梶井基次郎と牧野信一が、それから嘉村儀多もあつたかな。あとは谷崎がいくつかぐらい。なんか、そのぐらいしか小説はなかったんで、そういう創元選書という立派そうな叢書のなかに入っている作家つてことで一緒に読んだんです。⁽¹⁸⁾

川村によれば、梶井の作品の受容は全集以外にも行

わかれていたようである。梶井の受容を考えるならば、全集以外の刊行物をも含めて考えなければならないことの裏付けともなるだろう。

梶井の「檸檬」を収録した作品集は年表にすると次のようになる。

刊行年	タイトル	出版社
一九三一	檸檬	武蔵野書院
一九三四	梶井基次郎全集	六峰書房
一九三六	梶井基次郎全集	作品社
一九三九	城のある町にて	創元社
一九五〇	梶井基次郎集	新潮社(文庫)
一九五一	檸檬	酣燈社(文庫)
一九五一	城のある町にて	角川書店(文庫)
一九五四	檸檬・冬の日他九篇	岩波書店(文庫)
一九五九	梶井基次郎全集	筑摩書房
一九六七	新潮社が『梶井基次郎集』を『檸檬』に改題	
一九七二	檸檬	日本近代文学館
一九七二	檸檬・Kの昇天	講談社(文庫)
一九七二	檸檬・ある心の風景他二十編	旺文社(文庫)

ここで注目したいのは「檸檬」というタイトルの変遷である。梶井の作品集の中で「檸檬」というタイトルが最初に付けられたものは昭和六年の武蔵野書院版『檸檬』である。

「檸檬」というタイトルが付けられた根拠として、武蔵野書院版『檸檬』を刊行する際の梶井による「檸檬 これがい、

と思ひます。恰度巻頭へ来るから。然し普通の人にはレモンとは讀み下せないかも知れないかも知れないのが疵です。さし當り外に考えなし」という書簡と、淀野隆三による「『檸檬』は『青空』一月創刊号に発表された。「創作といつても短いのを一つ、——あまり魂の入っていないもの」を発表したと友人宛にいささか逆説めいて書いたが、梶井は自信を持って発表したのである。習作とか試作とかいいう気持は毛頭なかった。しかしそれは全然注意されなかった」という解説が挙げられるが、梶井の書簡によれば『檸檬』というタイトルにした理由は「恰度巻頭へ来るから」であり、「さし當り外に考え」はなかったものである。「檸檬」を梶井自身が評価していたことを示すものは後年の淀野の解説だけであり、果たして真に梶井が「檸檬」を「自信を持って発表した」かどうかを判断することは出来ない。

先に述べた川村が読んだであろう創元社の梶井作品集のタイトルは『城のある町にて』である。『檸檬』ではない。これは創元社だけではなく、刊行年表を参照すれば分かる通り、武蔵野書院『檸檬』以降の刊行物のタイトルに『檸檬』が付けられることは、通例とはされていないからである。これは創元社版『城のある町にて』の三好達治によるあとがきにて「城のある町にて」この書名は假りに私が撰んだものである。書中に収めた作品もまた私が私の好みに従つて假りにこの著者の作品中より撰み出したものである」と述べられて

いたことから裏付けられる。三好は「檸檬」を選ばなかったのである。

その後の一九五〇年から始まる新潮文庫、酣燈社学生文庫、角川文庫、岩波文庫による一連の文庫本刊行は「文庫本出版の空前の盛況」²²⁾の中で行われたようである。その盛況ぶりは「文庫本の繁栄は戦時各国に現れた現象であるが、最近のわが国の如きものは他に見られない所といえる」²³⁾までであり、「低下した購買力の吸引と、自社出版物の版權確保との二つのねらいを含めて、各社文庫本の企画にはげしい競争が展開され」²⁴⁾ていった。その後「文庫合戦という乱戦に明けて、文学全集、文学作品集に暮れ」²⁵⁾るようになっていき、「独創性なき焼き直し版とか、不完全集とか、回転資金かせぎと酷評されるが、いわゆる文学ものを中心とする全集の競争が一年中華々しくくりひろげられた」²⁶⁾のである。このような文庫本の盛況の中で刊行された梶井基次郎作品集であったが、「檸檬」をタイトルに冠することは通例ではなかった。ではいつの時点で「檸檬」タイトルは通例となったのか。

「檸檬」をタイトルに付すことが通例となったことにおいて着目すべきは、武蔵野書院版に関する書簡等ではなく、一九六七年に新潮文庫が今まで「梶井基次郎集」というタイトルで刊行していた文庫本を『檸檬』に改題し、その後続く刊行物のタイトルほぼ全てに『檸檬』が冠されるようになった点である。この新潮文庫の改題の際、淀野隆三は「改版に

際して」の中で「この度の改版に際し、従来の版の書名に変えて梶井の代表作『檸檬』を総題とした。また、原稿、初出誌その他を能う限り参照し、校訂に厳密を期したが、本文を新字新仮名に改め、梶井の文学が、より正しい形で、若い読者に一層親しまれることを願った。今回の改版が大方の好評を得れば幸いである」²⁷⁾と述べている。前述したように淀野は「青空台評會第一回」においては「檸檬」と「冬の日」は濃度が違ふ。「冬の日」の方が濃度が濃いと思ふ」²⁸⁾と述べていたにも関わらず、梶井の代表作が「檸檬」であると明記している。つまり、この時点までに「檸檬」が代表作であると見なされる何らかの契機があったようである。ではそれは一体何か。

四、「檸檬」研究状況の変化

ここで、「檸檬」の研究の変遷に着目していこうと思う。戦前の「檸檬」研究において長年非常に大きな影響力を持っていた評は、小林秀雄による一九三三年の「文芸時評——梶井基次郎と嘉村儀多」における「昨年梶井氏の創作集『檸檬』が上梓された時著者から贈られてこれを通読し、清澄鋭敏にみる作家資質と私は感服した」、「氏の創作集で作品は初期のものから年代順に並べられてをり、氏は劈頭の短篇『檸檬』の題名をとつてこの創作集に冠せてゐるが、この短篇が氏の全制作の導調をなしてをる」²⁹⁾、「だが梶井氏は語り難い作

家である。私は氏の一作一作に私の知らぬ氏の顔を見るような思ひがする、氏の生地を感じる様な思ひがする。そういう種類の作家は語り難い⁽²⁹⁾といったような言説であった。

このような小林の評に対し、鷺は「解説」の中で「その評価を不動のものとし、梶井の今日に至る価値の礎石が築かれることになるのである」とし、さらに「この評論が、梶井の殆ど全ての作品は同人誌などのリトルマガジンに発表され、その評価・力量が周辺の一部具眼の士の範囲にとどまっていたものを一挙に舞台上に押し上げ、同時に弾圧により下降を示し始めていたとは言え、プロレタリア文学の盛期に所謂芸術派の文学を称揚評価した功績は見逃せない⁽³⁰⁾」とも述べている。また、鈴木貞美も「解説」の中で鷺と同様「長い間、梶井基次郎に対する評価の内容と方向を左右してきたもの⁽³¹⁾」とし、このような小林の批評の方法を「資質還元主義」と呼んだ。

もちろん近年の「檸檬」研究にはこのような「資質還元主義」ではないものもある。棚田輝嘉の「物語への意志——梶井基次郎〈檸檬〉」では「檸檬」に続いて発表された作品が、なぜ「城のある町にて」であるのか等、「檸檬」の位置づけに関する新たな視点を提示し⁽³²⁾、日比嘉高は「身体・空間・心・言葉・梶井基次郎「檸檬」をめぐる（京都における日本近代文学の生成と展開）」の中で「身体と空間と心、そして言語の連関」を考察している⁽³³⁾。しかし、このような新たな視点を提示した研究もある一方で、「資質還元主義」的な「檸

檬」研究は盛んに行われ、現在まで残り続けているのである。鈴木は当時そのような「資質還元主義」に対して新たな方法分析の途を拓こうとしたものとして磯貝英夫の論や高田瑞穂の論を挙げてはいた。しかし磯貝は「だが、それらの作家（筆者注：磯貝曰く「他の多くの敏感な作家」）のかなり多くが、時代の狂躁的な動きに足をとられ、自己を見失うことになったのに対し、梶井が例外的に自己の資質のほぼ完璧な文学的定着に成功したということは特筆しなければならぬことである⁽³⁴⁾」と述べ、高田瑞穂は「磯貝くんのいわゆる「閉鎖的資質論」を正しく越えることは不可能であるにちがいない。むしろ私はこう言うべきであろう。「閉鎖的資質論」を超えるために先づひつひつようなものは、かえって正確な資質論である⁽³⁵⁾」と述べている。

磯貝の「梶井が例外的に自己の資質のほぼ完璧な文学的定着に成功した」や高田の「閉鎖的資質論」を超えるために先づひつひつようなものは、かえって正確な資質論である」といった言説は「資質還元主義」に対して新たな方法分析の途を拓こうとしているように思えない。磯貝の論は一九六二年高田の論は一九六四年のものであるから、少なくとも昭和三〇年代後半まで「資質還元主義」は続いていったのではないだろうか。

このような「資質還元主義」と並行する形で、「檸檬」において新たな研究がなされるようになる。それは梶井の詩

「秘やかな楽しみ」と習作「瀬山の話」を絡めた「檸檬」研究である。福永武彦の「檸檬」鑑賞³⁶⁾や、三好行雄の「檸檬」が最初期に行われたものであり、このような梶井の習作詩を用いた「檸檬」研究は、一九五九年に刊行された筑摩書房版『梶井基次郎全集』に「秘やかな楽しみ」や「瀬山の話」といった習作群が載録され、受容されるようになったために起こったと考えられる。現に福永の論は一九五九年全集刊行後に書かれ、三好の論は一九六三年に書かれている。

筑摩書房版全集によって受容された「習作、詩」の検討による「檸檬」研究について、鷺只雄は「解説」の中で次のように述べている。

論の積み重ねがないことは呆れるばかりである。むしろかえしと放置がそれであるが、殊に同人誌や各大学の国文学会誌所載の卒業論文に手を入れたものにこれが甚しい。梶井と言えは「檸檬」、「檸檬」と言えは草稿の検討からというパターンなのであるが、くりかえしが悪いというのではない。しかしそれが肯定と否定とを問わず先行研究の達成を踏まえていないかぎりにおいて無意味であることを言いたいのである³⁷⁾

梶井研究において「主流」の研究手法となっていたこのような「習作、詩」の検討による「檸檬」研究は、一層「資

質還元主義」を強化、物語化していったのである。つまり、この「梶井と言えは「檸檬」、「檸檬」と言えは草稿の検討からというパターン」となる「全集による梶井の草稿受容」が研究上の偏りの大きな要因の一つと考えられる。

「檸檬」が何故代表作となったのか。研究における偏りの要因は先に述べた「同様のモチーフが見られる習作、詩の発見」であろう。他の作品には見られない草稿や詩の発見は「檸檬」を梶井の作品群の中でも「研究しやすい」作品へと押し上げていった。つまり、小林が言うところの「語り難い」作家の「語り難い」作品の一つであった「檸檬」が、他の作品と比べ「語りやすい」作品となっていたのである。

「習作、詩の発見」とそれに伴う「檸檬」研究の隆盛は一九五九～一九六三年（昭和三四～三八年）から始まっている。そして「檸檬」タイトルの通例化は一九六七年（昭和四二年）から起こる。「檸檬」研究の隆盛、増加と「檸檬」タイトルの通例化がパラレルに起こることによって、「檸檬」という作品は梶井の作品群の中でもより一層代表作という性格を強めていったのだ。

おわりに

「檸檬」研究の隆盛、増加と「檸檬」タイトルの通例化はパラレルに起きてはいたが、研究の隆盛による「研究上の受容増加」とタイトルの通例化による「一般読者の受容増加」

はそのまま直結するわけではない。「檸檬」の受容において更に考えなければならぬものとして、「檸檬」の国語教科書採択の事例が挙げられるだろう。「檸檬」の国語教科書採択は大日本図書『高等学校現代国語三』と秀英出版『国語現代編三』において行われた。そしてこの採択はまさに「研究の隆盛」と「タイトルの通例化」の間に当たる一九六五年（昭和四〇年）から行われていったのである。

この「国語教科書採択の事例」を考察していくことは今後別の論で扱うとして、今回は「研究の隆盛」と「タイトルの通例化」という二点のみに着目して論じた。年代順にするならば「研究の隆盛」↓「国語教科書採択」↓「タイトルの通例化」という流れになるだろう。しかし、あくまでこれらは直線的な流れではなく、バラレる流れであったというのが筆者の考えである。

注

- (1) MARUZEN & JUNKDO 【8月21日】丸善京都本店 グラ
ンドオープン」を参照。
http://www.junkudo.co.jp/mj/news/detail.php?news_id=77
Accessed:2015/09/25
- (2) 福永武彦編「梶井基次郎、その主題と位置」『近代文学鑑賞
講座 第一八巻』、一九五九年、角川書店
- (3) 須藤松雄「梶井基次郎研究〔改訂版〕」、一九七六年、明治書
院
- (4) 三好行雄「檸檬」『國文學 解釈と教材の研究 昭和六三年
十二月号』、一九八八年、學燈社
- (5) 黒井千次「梶井基次郎、存在と視線の間」『國文學 解釈と
教材の研究 昭和六三年十二月号』、一九八八年、學燈社
- (6) 国文学論文目録データベース <http://base.nijiac.jp/~ronbum/>
Accessed:2015/09/25
- (7) 外村繁「梶井の「過古」について」『青空』、一九二六年三月、
青空社
- (8) 井伏鱒二「或ひは失言？」『薔薇派』一九二八年、薔薇派発
行所
- (9) 川端康成「梶井基次郎氏の「愛撫」『作品』一九三〇年、七
月号、作品社
- (10) 匿名「同人雑誌短評 其の一」『大學左派』一九二八年八月、
大學左派編輯所
- (11) 『東京日日新聞』一九三二年二月二八日
- (12) 青空同人編「青空合評會第二回」『青空』一九二七年四月
- (13) 伊藤整「檸檬」『新文學研究』一九三一年七月号、大空社
- (14) 梶井基次郎「檸檬」二〇〇三年、新潮社
- (15) 梶井基次郎「檸檬」二〇一一年、角川春樹事務所
- (16) 鷲只雄「解説」『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島
敦』一九七八年、有精堂
- (17) 鈴木貞美『日本文学の論じ方——体系的研法』二〇一四年、
世界思想社
- (18) 『ユリイカ 詩と批評』5・2 一九七三年、青土社
- (19) 梶井基次郎「淀野隆三宛書簡」(一九三一年二月一四日)の
の。淀野隆三、中谷孝雄編『梶井基次郎全集第三巻』一九五九

- 年、筑摩書房から引用した。）
- (20) 淀野隆三編「解説」『檸檬』一九六七年、新潮社
- (21) 三好達治編「あとがき」、「城のある町にて」一九三九年、創元社
- (22) 出版年鑑編集部編『一九五二年版出版年鑑』一九五二年、出版ニュース社
- (23) 同上。
- (24) 同上。
- (25) 出版年鑑編集部編『一九五三年版出版年鑑』一九五三年、出版ニュース社
- (26) 同上。
- (27) 梶井基次郎『檸檬』一九六七年、新潮社
- (28) (12) を参照。
- (29) (16) を参照。
- (30) 『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島敦』一九七八年、有精堂
- (31) 鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集 近代文学作品論集成⑫』二〇〇二年、クレス出版
- (32) 棚田輝嘉「物語への意志——梶井基次郎『檸檬』」『日本近代文学第54集』一九九六年、日本近代文学会
- (33) 日比嘉高「身体・空間・心・言葉・梶井基次郎『檸檬』をめぐる（京都における日本近代文学の生成と展開）」『佛教大学総合研究所紀要二〇〇八（別冊）号』二〇〇八年
- (34) 磯貝英夫「梶井基次郎・檸檬」『現代日本文学講座 小説6』一九六二年、三省堂
- (35) 高田瑞穂「資質論をどう超えるか——梶井基次郎私見」『本』一九六四年、麦書房
- (36) 福永武彦「『檸檬』鑑賞」『近代文学鑑賞講座18 中島敦・梶井基次郎』一九五九年、角川書店
- (37) 三好行雄「檸檬」『國文學 解釈と鑑賞』一九六三年、至文堂
- (38) (16) を参照。
- (にしお・たいき／早稲田大学大学院)